



ウィークエンド

わが本 ちが母校

北九州市立大学

日本建装工業社長

池邊 かずとし 和壽氏 (67)



空母キティホークの船上に立つ池邊さん

大学に入ったのは61年(昭36)のこと。かつて「北九州外国語大学」と呼ばれていた大学で、当時は学生が500人いるかないかの小さな大学

だった。将来は商社に入って海外勤務をしてみたいというあこがれがあったので英語科を選んだ。

大学時代の経験で一番思い出に残っているのが、出身地・大分でのア

度胸ついた米兵の通訳

アルバイトだ。61年から63年にかけて、別府湾には米軍の第7艦隊がたびたび入港していた。空母「キティホーク」やそれに付随する駆逐艦や護衛艦もあわせると、多い時には一晩で4000〜5000人の米兵が別府の街に押し寄せた。

別府には通訳が数人しかいなかった。大学に入ったばかりでろくに英語も話せない私だったが、

外大に入ったからといって遅くまで彼らにつきあってもいいが、年々少なくなっている。1日360円の時代で1時間に2〜4時間も助かった。

同級生だった片岡章君(元西南学院大学教授)は、私と正反対でまじり出すと、トラアルも多かった。けんかや無銭飲食、警察官ともめたりと挙げればきりが無い。読

み書きが出来ない人も多かった。私もよくわからないで度胸がついた。社会人になって日本人が一人もいない米国の街で仕事をしたこともあったが、学生時代の経験が大いに役に立った。アルバイトの期間中は大学の授業もそっちのけだったが、あのアルバイトで経験したところこそが文字通り、生き

た勉強だった。(大分市三ヶ田町3、097・545・2554)